

# めくら星

小川未明

青空文庫



それは、ずっと、いまから遠い昔のことでもあります。

あるところに目のよく見えない娘がありました。お母さんは、娘が、まだ小さいときに、娘をのこして、病気のため死んでしまいました。その後にきましたお母さんは、この娘を、ほんとうの自分の産んだ子供のようにかわいがらずに、なにかにつけて娘につらくあたりました。

娘は、目こそあまりよく見えませんでしたけれど、まことにりこうな女の子でありました。そして、後にきたお母さんに産まれた、弟の三郎の守りをしたり、自分のできるかぎりの世話をしたのであります。

こんなに、弟をかわいがりましたのにかかわらず、お母さんは、やはり娘を目の敵にしました。お母さんは、じつにももの道理のわからない人でありましたけれど、弟の三郎はこの姉を慕い、そのいうことをよくきく、いい子でありました。

三郎は、一羽のかわいらしい小鳥を飼っていました。その小鳥は、羽の色が美しいばかりでなく、いい声を出して、朝から晩までかごの中でさえうたいましたから、三郎はこの小鳥を愛したことは一通りでありませんでした。また三郎のいちばん大事

にしていたのは、この小鳥であつたことはいうまでもありませんでした。

いじの悪い母親は、娘に向かつて、

「おまえは、毎日鳥に餌と水をやりなさい。そして、もし鳥をにがすようなことがあつたなら、そのときはたいへんだ。そうすれば、もう、おまえはこの家から出ていくのだ。けつして、家に置きはしないから。」といいました。

おとなしい、目のよく見えない娘は、どんなに、この母親のいいつけを当惑したで  
ありましょう。

小鳥は、そんなこととは知らず、朝からかごの中でとまり木にとまって、ないたり、さえずったりしていました。そして、細いかごの目から、遠い空などをながめていますうちに、小鳥はどうかして、広い世へ出て、自由に、あの青々とした空を飛んでみたいものだと思つたのであります。

小鳥は、自分の友だちらが、木の枝や、かなたの空でないのを聞きますと、その気ままな生活がうらやまれたのであります。自分もどうかして、このかごの中から逃げて出て、せめて一目なりとも、世の中のさまざまな景色を見たいものだと思ひました。

こう小鳥が外にあこがれていますうちに、ある日のこと、目のよく見えない娘は、餌猪

口をかごの中に倒して、それを直そうと気をもんでいました。小鳥は、娘の手とかごの入り口のところにつきまのあるのを発見しましたので、すばやく身をすぼめて、ついとそこから、外に逃げ出してしまいました。

小鳥は、まず屋根の上に止まりました。そして、これからどっちへ向かって逃げていったらいいかと、しばし思案にふけたのです。そのとき、家の内では、なんだか大騒ぎをするようなようすでありましたから、まごまごしていて捕らえられてはつまらないと思いましたが、一声高くないで、遠方に見える、こんもりとした森影を目あてに、飛んでいってしまいました。

娘は、小鳥を逃がしてしまおうと、たいへんに驚き悲しみました。どうしらいいだろうと気をもみましたけれど、なにぶんにも目がよく見えませんので、どうすることもできないので、ただ、うろろう騒いでいました。

このとき、三郎は姉のそばに駆けてきまして、

「姉さん、鳥はどこへいったの！ 僕の大事にしておいた鳥はいなくなってしまうた。僕は、どうしたらいいだろう。」と泣き出しました。

やさしい姉は、弟をいたわって、

「三郎さん、わたしが悪かったのだから、どうか堪忍しておくれ。あんなに三郎さんがかわいがっていた鳥を逃がしてしまつて、わたしが悪かったから、どうか堪忍しておくれ。きつと、わたしが鳥を探して捕まえてきてあげるから、泣かないでおくれ。」と  
いいました。

この物音を聞きつけた母親は、なにごとが起こつたかと思つて、奥から出てきました。そして、その次第を知ると、たいへんに怒りました。

「三郎のあんなに大事にしておいた鳥を逃がしてしまつて、おまえはどうするつもりです。いつかの約束ですから、さあ、おまえは、この家から出ていってしまうのです。どこへでもかつてにいつてしまうがいい。」と、母親はいいました。

娘は手を合わせて、けつして悪い氣でしたのではないから、許してくださいと泣いてわびましたけれど、もとより、これを機会に娘を追い出してしまふ考でありましたから、母親はなんといつても娘の過ちを許しませんでした。弟の三郎は、姉がかわいそうになりましたので、ともに母親のたもとにすがつて許しを請いましたけれど、母親はついに許さなかつたばかりでなく、娘を家から外へ追い出してしまいました。

「そんなに家へ入りたければ、逃げた鳥を探して捕まえてくるがいい。」と、母親は、

娘むすめを後目しりめにかけてしかりました。

娘むすめはやつと顔かおを上げあげて、

「三郎さぶろうさん、

わたしは、きつと鳥とりを探さがして捕つかまえてきてあげますよ。」と、涙なみだながらに

いいました。そして、彼女かのじよは、いずこへともなく立ち去さってしまったのであります。

娘むすめは、空からになったかごをぶらさげて、あてもなく町まちから村むらへ出でて、村むらからまた野原のほらへと、

さまよい歩あるいたのであります。

もしやどこかで、聞き覚えきおぼのある鳥とりの声こえはしないかと、耳みみを傾かたむけましたけれども、あた

りは、しんとして、なんの鳥とりのなく声こえもしなかつたのであります。

「どうか、鳥とり！ 鳥とり！ このかごの中なかへ帰かえっておくれ。おまえが帰かえつてくれないと、わた

しは家うちへ帰かえられないのだから、どうかこのかごの中なかに帰かえつてきておくれ。」と、娘むすめは、あ

てもなく逃にげていってしまった鳥とりに向むかって、独ひとり言ごとのように頼たのみました。しかし、どこ

からも鳥とりの飛とんで帰かえつてくるようすがありませんでした。

娘むすめはしかたなく、野原のほらをさまよつて、だんだん森もりの中なかから、山やまのふもとへ歩あるいてきまし

た。そのうちに日ひはしだいに暮くれかかったのです。

「どうしたらいいだろう。もし鳥とりがこのかごの中なかに帰かえつてきてくれなければ、わたしは、

弟おとうに対してたいしてすまない。お母かあさんは、わたしの過あやまちをけつして許ゆるしてはくださるまい。しかたがないから、わたしは死しんでしまおう。」と、決けつ心しんしながら、とぼとぼと、なおも途みちを歩あるいてきました。

高たかい山やまの端はしが、赤あかく、黄きいろ色いろく色いろづいては、いつしか沈しずんでしまいました。娘むすめは悲かなしく、日ひの沈しずむのをながめました。もう家いえを出いでてからだいぶ遠とく歩あるいてきました。いまごろ、弟おとうや、お母かあさんは、どうしていられるだろうと思おもうと、さびしく、頼たよりなくなつて涙なみだがわいて出いでてきました。

そのうちに、彼かのじよ女の歩あるいている路みちは、いつしか尽つきてしまつて、目めの前まえに青あおい青あおい池いけが見みえました。日ひはまつたく暮くれて、空そらの星ほしがちらちらとその静しずかな水みずの上に映うつつていました。

娘むすめは、目めがよく見みえませんけれど、この深ふかそうに青あお黒くろく見みえる、池いけの面おもてに映うつつた星ほしの光ひかりだけはわかりました。彼かのじよ女よは、ずつとその池いけの面おもてを見みつめて、死しんでしまおうかと思し案あんしていました。

ちやうどそのとき、水みずの中なかから、  
「姫ひめ、姫ひめ、どの星ほしになる。金きんの星ほしか。銀ぎんの星ほしか。それとも紫むらさきいろの星ほしか。」という声こゑが



聞こえたのであります。

娘は、これはきつと、神さまが自分を救つてくださるのだからと思ひました。お星さまになつたら、もういままでのように悲しいこともなければ、またつらいこともなからう。そして、なつかしい真実のお母さんにあうこともできれば、また三郎さんの大事にしていた鳥を、世界じゅうめぐりめぐつて探すこともできるだろうと思ひました。

また、このとき、水の中から、先刻と同じ声で、

「姫、姫、どの星になる。金の星か。銀の星か。それとも紫色の星か。」と、姿が見えないけれど、同じことをいいました。

むすめかんが  
娘は考えて、

「金の星になる。」と答えました。すると、

「金の星は早いぞ。早く出て、遅く入る。」と、また水の中からいいました。

娘は、これは、金星は、早く空に出て、遅く海に入るのだから、早く池の中に飛び込めというのだからと思ひましたから、さっそく手を合わせて、神さまに祈りながら、ざんぶりとばかり、水の中に身を投げ込んでしまったのであります。

その夜から、空に、金色の新しい星が一つ増えました。

けれど、その星は、めくら星でありました。ほかのお星さまのように、遠く、高く、地から離れて、天上界に住むことができなないのであります。毎夜、森や、林や、野の上近くさまよって、このお星さまは、なにか探ねています。それは、死んだ姉が、なお、弟のかわいがっていた鳥を探しているのであります。

ある日のこと、山や、森や、林や、河は、みんないつしよに集まって相談いたしました。

「あのめくらの星は、ほんとうにかわいそうだ。」

「毎夜、この下界の近くにまで降りてくる。もし、山や、森に突きあたったらどうするつもりだろう。」と、彼らはたがいに話し合いました。

「こりや、おれたちが、あの星に注意してやらなけりやならない。」

「そうだ。それがおれたちのすべきことだ。」と、彼らは、またいいあいました。相談がすむと、彼らはたがいに別れてしまいました。

どんな晩も、雨の降らないかぎりは、めくら星は、金色に光つて、下界に近く空をさまよいます。みなさんは、金色に輝くお星さまが、山の頂にとどきそうになって過ぎるのを見るであります。そのとき、ふもとの谷川は、声をかぎりに叫びます。また、

森には、風が起こつて、ゴーゴーと鳴ります。ある山は、赤い火を噴いて、星に警戒します。

めくら星は、高い山の頂につきそうになつて、この物音を聞きつけて、さも寒そうに身ぶるいしながら、青い青い夜の空をあてもなく、無事に過ぎてゆきます。

神さまは、めくら星となつた娘を、かわいそうだと思われました。けれど、逃げた小鳥にべつに罪のあるわけではありませんから、それを罰することができませんでした。ただ、めくら星が毎夜、地に近く降りて鳥を探しているのを不憫と思われて、これはいくら探してもわからうはずはないから、逃げた鳥は、ほかの鳥のように昼間はないたり、さえずつたりさせずに、夜にかぎつてないたり、さえずつたりさせてやろう。そうすれば、めくら星はきつと、そのなき声を聞きつけて探しあてることができるだろうと、神さまは思われたのであります。

森に、山に、林に、みんなほかの鳥は昼間太陽の輝いている間は、おもしろく、楽しく、こずえからこずえにさえずり渡つているのを、独り、昼間は眠つて、真つ暗な夜の間眠ることができずに、反対にないている鳥があります。これは、昔、かごから逃げていなくなつた鳥の子孫らであります。しかし、めくら星は、永久に森の中に近づくこと

ができません。空<sup>むな</sup>しく、はるかにほととぎすや、ふくろうのなき声<sup>こゑ</sup>を聞きながら、高い山<sup>やま</sup>の頂<sup>いた</sup>を過ぎ<sup>すぎ</sup>るのです。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年6月

※表題は底本では、「めくら屋《ぼし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# めくら星

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>